

阪神・淡路大震災特集

神戸大に問う

震災の教訓は今に活かされているのか

神戸大は阪神淡路大震災によって大きな被害を受けた。あれから17年が経ち、建物や様子は震災の影も残っていないように感じる。だが、それだけで本当に復興したといえるのだろうか。また、今後神戸で災害が起こった時にどう対応するのか。神戸大が災害に対して強い大学になっているのか。阪神淡路大震災で起こったことを踏まえながら今の神戸大の防災策、そして防災意識について検討する。

震災の教訓は今に活かされているのか

神戸大は阪神淡路大震災によって大きな被害を受けた。あれから17年が経ち、建物や様子は震災の影も残っていないように感じる。だが、それだけで本当に復興したといえるのだろうか。また、今後神戸で災害が起こった時にどう対応するのか。神戸大が災害に対して強い大学になっているのか。阪神淡路大震災で起こったことを踏まえながら今の神戸大の防災策、そして防災意識について検討する。

大学本来の役割 見失うな

災害が起きたとき、大学には何が求められるのか。東日本大震災において学生連と共に行われたキャンパスを巡る活動、岩手県大船泊を拠点として積極的に行っていたボランティアに従事している発達科学部の松岡広路教授にお話を伺った。

都市安全研究センター

一方、大学も災害が起きた際、地域社会に対して積極的に支援していくべきだとする考えもある。都市の安全と安心を確保するための総合的な研究を目的に1996年に設立された都市安全研究センターでは、地域の協力は必要不可欠な活動を進めようとしている。同センターで復興計画に関する研究を行い、阪神淡路大震災の際、実際に

大学側も積極的な支援を

一方、大学も災害が起きた際、地域社会に対して積極的に支援していくべきだとする考えもある。都市の安全と安心を確保するための総合的な研究を目的に1996年に設立された都市安全研究センターでは、地域の協力は必要不可欠な活動を進めようとしている。同センターで復興計画に関する研究を行い、阪神淡路大震災の際、実際に

都市安全研究センター

一方、大学も災害が起きた際、地域社会に対して積極的に支援していくべきだとする考えもある。都市の安全と安心を確保するための総合的な研究を目的に1996年に設立された都市安全研究センターでは、地域の協力は必要不可欠な活動を進めようとしている。同センターで復興計画に関する研究を行い、阪神淡路大震災の際、実際に

本来自然災害に際しては避難民の受け入れに関し、施設を避難所として神戸市に提供することが大学の役割であり、インフラの管理は地方自治体、すなわち神戸市が責任を持つ。だが神戸大にある避難所は市の管理や監督権が及ばない施設であったため、市と大学による二重構造の運営が行われた。

国際化学部キャンパスは、本来災害時の市の避難所に指定されていなかった。しかし、避難所となっていた近隣の小学校が避難住民を受け入れられなくなったため、まほろば地区のガスタック爆発の恐れがあり、周辺に住む避難民の受け入れを要請された。まほろばから17日夕方から19日にかけて、教養と体育館に避難住民を受け入れた。急遽避難所として機能することになったため、救援物資の配給がうまくいかず、一時は避難住民を学内の避難所では最大の約1600人抱えた状態で、毛布が住民の4分の1にしか配布できない状況にまでなった。

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に

阪神淡路大震災の際、実際に



国文キャンパスの体育館、武道場には大勢の被災者が詰めかけた (1995年1月27日・ニュースネット委員会貯蔵)



慌ただしさの増す対策本部 (1995年1月28日・ニュースネット委員会貯蔵)

編集後記

この特集では、学生ではなく、あえて大学に求められることを取り上げた。それは、大学がただの学術機関としてではなく、学生や職員、はたまた周辺地域の住民を巻き込んだ、災害時に対する大きな枠組みになりつつあることだ。

【松本 文】

白木健介さんの父 白木利周さん

阪神・淡路大震災の発生から17年の時がたとうとして、息子の白木健介さん(当時経済・3年)を亡くした父、利周さんは今年も「1・17のつどい」運営スタッフとして1月17日を東遊園地で迎える。阪神・淡路大震災から立ち直れない人々を迎え、静かな時を過ごす場所を設けることも、2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地にも、メッセージを発信している。

利周さんはNPO法人「白木利周さん」の代表理事。阪神・淡路大震災の時は、高台に作り直して、津波に強い町を作らないといけない。利周さんたちの震災への取り組みは、これからも続いている。

【片山 孝】

遺族の17年

阪神・淡路大震災の発生から17年の時がたとうとして、息子の白木健介さん(当時経済・3年)を亡くした父、利周さんは今年も「1・17のつどい」運営スタッフとして1月17日を東遊園地で迎える。阪神・淡路大震災から立ち直れない人々を迎え、静かな時を過ごす場所を設けることも、2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地にも、メッセージを発信している。

利周さんはNPO法人「白木利周さん」の代表理事。阪神・淡路大震災の時は、高台に作り直して、津波に強い町を作らないといけない。利周さんたちの震災への取り組みは、これからも続いている。

【片山 孝】

加藤貴光さんの母 加藤律子さん

「誰かに話さなくて、気持ちが楽にならなかった」と振り返る。その経験から加藤さんは、今も講演に出向き、自身の経験を伝え続けている。今年発生した東日本大震災当日も講演を行っており、発生はインターネットで知った。テレビで映像を見たときには、当時のことを思い出して、涙が止まらなかった。

「誰かに話さなくて、気持ちが楽にならなかった」と振り返る。その経験から加藤さんは、今も講演に出向き、自身の経験を伝え続けている。今年発生した東日本大震災当日も講演を行っており、発生はインターネットで知った。テレビで映像を見たときには、当時のことを思い出して、涙が止まらなかった。

【香月 隆彰】